会　議　記　録（概要）

会　議　名	令和２年　第４回三田市文化ビジョン検討委員会
日　　時	令和２年８月１７日（月）　午前１０時００分から１１時４０分
場　　所	三田市総合文化センター　郷の音ホール２階　会議室１
出　席　者	田辺委員長、木村副委員長、阪本委員、加藤委員、服部委員、小中委員、門垣委員、山口委員、林委員、柳井委員 （１０名／１１名）
事務局等	矢萩広報交流政策監　　西田地域創生部長　　印藤同部市民協働室長 （以下、部・室名を省略） 横溝文化スポーツ課長、畑同課副課長、山崎同課課長補佐、森鼻同課係長 （コンサルティング業者）㈱地域社会研究所　酒井
傍　聴　者	３名
添付資料	レジュメ、資料６の変更、資料１２、資料１３

会議概要

１　開会（10:00～）

広報・交流政策監挨拶

京都の大文字（五山送り火）が、今年は、賑やかなお祭りではなく、１か所で５つのポイントだけ点火して実施されたことの意味を語り継いでいきたいと話す中学生をニュースで見たが、まさに新型コロナ（禍）の時代だからこそ、長く伝わってきたものの価値、本当の意味というものを見つめ直す時期なのかと感じた。

本日は「文化芸術を通じた地域創生」をテーマに幅広い意見をいただきたい。

前回、ご提案いただいた郷の音ホールの活動を市の広報誌に掲載する点については、来年１月からリニューアルする広報紙で実施することとした。さらに詳細を知りたい人のためにＱＲコードを表示する。また、文化芸術に携わる市内のプロフェッショナルな人材の情報については、川本幸民、横山エンタツなどが例として出されたが、今の人々にＰＲできるよう現在活躍している人物の情報収集を進めていきたい。

２　報告事項

（１）会議の成立　過半数以上出席につき成立

（２）傍聴報告　　傍聴者３名

（３）分科会担当委員【資料６の変更】

（４）次回（第５回）以降の開催日【資料１２】

３　協議事項

「文化芸術を通じた地域創生」【資料１３】及び別紙

＜事務局から説明＞

事務局　「⑤文化芸術を通じた地域創生」【資料１３】及び、「三田市で取り組まれている文化芸術活動」【資料１３の別紙】について説明。さらに、スライドにより、三田市で取り組まれている活動等について説明。

委員長　資料１３に基づいて、文化芸術を通じた地域創生について質問、意見をいただきたい。

委員　【資料13】について、（1）の「その他建造物」について、三田の古い町並みの活用がなされていないように思う。三田市の歴史資料収蔵庫にはたくさんの文化財や郷土資料出土品があると伺っている。資料があまり活用されていないのではないか。今後、資料の見える化や広く活用を進めてほしい。

事務局　国・県などに多様な歴史資産の保存の仕組みがある。街並み保存については、三田では一部の古い街並みは失われてしまっているが、個々の建物で歴史的に素晴らしいものは残っている。また街並みを文化財として保存するということは、私権の制限も必要になってくる。私権の制限をしてまで保存していこうという市民との合意形成や保存への気運の高まりが現在までなかった。街並みの保存や活用については課題がある。収蔵庫の収蔵品はふるさと学習館の展示物や学習プログラムの教材として展示活用をすすめているが、一部にとどまっている。

委員長　市の結論としては、両方とも対応ができていないということのようだが、文化ビジョンの委員会としては、将来的に街並み保存を考えるべきとするのか、埋蔵文化財を活用できるようにするのかを決めていくことになる。

副委員長　資料１３の文化芸術の現状（資源）に「観光資源としての文化芸術」という表現があるが、文化芸術を通じた地域創生は、地域経済を元気にする観光資源に集約するべきなのだろうか。

委員　地域創生は「観光資源」だけではなく、人口減少対策でもあり、子育て世代をどれだけ呼び込めるか、複数の選択肢から三田を選んでもらうことだと思う。人口対策として地域を元気づけるのは、文化芸術活動で何ができるかだが、例えば、食育、自然・環境教育の充実は、子育て世代にとっては魅力的だと思う。

一方で、屋外の彫刻や立入禁止の文化財の存在は、ほとんどアピールができていないと思う。観光面でのアピールはあるかもしれないが、観光と地域創生は必ずしもイコールではないと思う。

委員　資料は、現状の施策や事業を紹介するもので、三田の伝統文化と新たな文化芸術を踏まえ、何かを生み出したいということだと思うが、それが経済の好循環を生み出すことにつながるのか、イメージが湧かない。

委員長　文化財があるのに市民が目にする機会がない、という現状と共通する面がある。

委員　ウイズコロナ、アフターコロナの状況における新たな文化芸術への展望として、議論が必要である他、コロナ禍の中で引き籠っているシニア世代を含む市民が、すぐにこの状況が解決されないとすれば、10 年間のビジョンを考えるうち

の３年から５年間のことだと思う。そういう環境で、市民に文化芸術に対する誇り、自信、生きがいを感じてもらえるよう、教育も含めて、どのように文化資源と市民との接点を作っていくかが大事だと思う。ビジョンを描く上で、その辺りに焦点を当てる方がより現実的である。

委員長　ウイズコロナ、アフターコロナの状況に応対した展望は、短期的なものではないかと考える。三田市のビジョンとして考える方向性としてとなると、長期的な視点に立ち地域創生を考えたい。１つは、内側に向かうもの、市民の自信、誇り、愛着の醸成であるが、経済面に直結するものではない。もう１つは、外側に向かって、三田にはこういうものがあると発信し、三田に来たいと思ってもらうことで経済が動き、それが観光である。

資料の「⑤文化芸術を通じた地域創生」の「(Ⅰ)観光資源」、「(Ⅱ)賑わいの創出と地域力アップ」には根本の考え方として、三田の個性（アイデンティティ）を作り上げるという考えを付け足してはどうか。結果として市民にはこのまちに住み続けたいという思いを持ってもらうことが大事で、誇りになる項目が必要だと思う。例えば、三田マルシェについて、マルシェは全国どこでも実施しているのでインパクトはないが、他にない特徴的なものを作り出していければ、また違う印象になる。

どこの自治体でもこぞって取り組みにおいて失敗したのが、インバウンドの集客であった。三田市は、阪神間と神戸市の 300 万人のマーケットがあれば十分観光事業が成り立つ。その点では「サンタ×三田プロジェクト」はインパクトがあると思う。他にまねができない点が評価できる。ぜひフィンランドのサンタの故郷とも交流するなどして継続されるとよい。

市内に点在するモニュメントや彫刻は、身近過ぎて住民には評価されない場合もあるが、造形芸術が好きな人にとっては値打ちがある。三田には全国的にも価値の高い作品が多いので、もっとインターネットでの紹介や、何らかの特典をつけるなどの手法での保全と活用されることが必要。また、三田市出身の横山エンタツさんについては、NHK のドラマ「わろてんか」でも注目された。出身地にエンタツのモニュメントをつくるための募金活動などをすればニュースになったと思うが、市として具体的に取り組めないか。

ビール検定の取組みは三田らしさがあって、成功していると思うが、地元からの参加者が毎年微減しており、市外からの参加者は減っていない。検定の設問は７割がビール分野の問題、残りの３割が三田のご当地分野である。次回からは必修の設問以外に、選択できる分野の設問を設けて、三田のことなら答えられるという地元の人々を再び呼び込む工夫をしてはどうかと思う。

三田市の個性を作り上げて市民に対してもっと訴求するとともに、市外にもアピールする必要がある。地域創生のまとめ方として三田の個性を作り上げるという方向で検討してほしい。

事務局　資料の地域創生の考え方については、皆さんのご意見を参考に検討していきたい。課題提起のウイズコロナ、アフターコロナにおける新たな文化芸術への展望について、本日、追加で丹波篠山市のデカンショ祭りの資料を配布したが、コロナ感染症対策で開催中止になったものの、ネットを活用する形でイベントを実施されており、参考になる。三田まつりも中止したが、斬新なアイデアを出

して取り組む上で、どういう配慮をすればよいか、また、行政から市民にどのように働きかければよいか、アドバイスをいただきたい。

委員　資料１３で紹介されている内容は、基本的に他（市町）でも行われているようなものであり、市民に伝わっていない面もある。三田市独自の活動をどのように活発化していくのかが大事である。

委員　数年前、三田まつりの花火中止の動きがあったときに、市民の強い熱意と行動で継続が実現したように、市民の思いは熱いと思う。そのような市民の意欲が、どうすれば市に伝わり、実現してもらえるのかということではないか。自分は音楽家なので、どのようにすれば市民に音楽を広げられるかと考えたときに、市がどのように協力してくれるかがポイントになる。

副委員長　文化芸術の場合、育てる人、する人、見る人、支える人の４つの立場があり、それらをつなぐ場（人）が必要となってくると思う。県（県芸術文化協会）では、そのために「アーティストサロン」をつくっている。ここには、地元新聞社で長年、文化芸術事業を担当してきた方など専門家をコーディネーターとして配置し、コンサートに出演したい音楽家と、コンサートを実施したい音楽ホールをつなぐなど、文化芸術面での人材バンク的な機能を果たすとともに、アーティストの相談の場、アーティスト間の交流の場ともなっている。

また、文化芸術資源の中でも人材は極めて重要である。因みに民間企業の中では、人材の「材」に財産の「財」を充てているところがあるくらいだ。三田市にも多くのアーティストやアート関係者が多数居住されておられる。これらの存在を市民に知らせ、また、これらの方々に協力・活躍してもらうことは、市民にとって、特に子どもたちにとって大きな力になり、誇りにもなると思う。

さらに、こうした人材を発掘し、市内外に発信などを行うには、先に述べたアートコーディネーターのような文化芸術の専門的な人材も必要になるのではないか。

委員長　例えば新宮晋さんを紹介するとか、もっと活用すべきだと思う。また、文化サロンのような場があれば、ふらっと寄って、つながる場所になる。市役所の人は安定性を重視して判断できない部分があるが、実現すれば今までにない動きが期待できる。また、広報・交流政策監のような、民間から起用したポストをもっと三田市に作っていただいた方が良いと思う。市役所は人事異動で人が代わるので、行政とは違う視点から「つなぐ」立場の、文化施策監とか、観光政策監とか、長期的に施策の流れがわかる専門監を置いて欲しい。今はいろんな事業がスムーズに進んでいないと思う。

委員　市の文化情報を毎月発信してはどうか。例えばガーデニングのイベントは全国に知られている。そういうイベントカレンダーがあれば、市外の友人・知人を招く時期の参考になる。内向きにも、外向きにも使えると思う。

委員長　変更が効く月ごとのカレンダーとは別に、一年間のカレンダーを作っておくと良いかもしれない。

委員　一年のタームであれば、イベントの時期を含めた、先々の予定を立てるときに参考になる。一定期間ごとのカレンダーでもいい。

委員　それなら、外向きに年間カレンダー、内向きに月間カレンダーでもいいので一考してほしい。

副委員長　文化芸術の政策立案は、行政が行うものだが、これだけで担当者は十分多忙であり、政策を事業として具体的に実施していく際には、市民の参画を得ながら取り組むことが必要になるだろう。

市民の中には、様々な知識や経験を持つ方や、著名なアーティストと繋がりを持っている方もおられるだろう。こうした方の中から、ボランティアで汗をかいてやろうという志を持つ市民を募り、協働して事業を展開していかないと、行政だけでやり切るには、人手も足らず、財政的にも負担が大きくなるのではないか。

事務局　これまで、そういう視点が市にはなかった。つなぐ役割、人材の必要性はビジョンの考え方にも加えたい。

政策監　市職員は、少ない人員体制と予算でよくやっていると見ているが、どうしても守りになってしまうため、攻めることもしたい。そのためには、ボランティア、元気なシニア層の外部からの登用も力になると思うので、文化を愛し、自信を持って活動している人を発掘して協力していただければと思う。守る・攻めるの双方をつなげる人材を見出して行きたい。

委員　三田らしさとは何か、を考える時に、人口が少ないことも一つかと思う。大きい都市になるとなかなか動かせないことも三田では動かせる。

また、市庁舎コンサートは若手にとって大きなチャンスの場である。市広報「伸びゆく三田」のような広報力は我々にはない。この力が地元への周知を含め非常に大きいと思う。先ほどの話にもあったが、攻めるか守るかという点では、実演家としては中道ではなく攻めることが重要だと思っている。ウイズコロナの新しい生活様式のなかで、リスクゼロはあり得ないと感じており、２、３月はガイドラインがなく活動ができなかった。ガイドラインができた今、ルールに従って活動をしようとしても、行政は安全性を求めてリスクを避けるので、コンサート等の活動実施が難しい。国、県、音楽団体もガイドラインを示しており、それらすべてに従っているのに、実施できない状況は実演家としては納得いかない。

委員長　この委員会では、10 年、20 年先の将来を考えようとしているので、感染症の経過をふり返ってみると、新型コロナウイルス感染症に関する問題については、短期的なことであまり悲観的に考える必要はないと思うが、もっと中長期的な視点で考えるべきである。文化芸術においても攻撃は最大の防御であると思う。

事務局から紹介してもらった「三田まつり」と「デカンショ祭り」の対応の違いは好例であり、「三田まつり」、「篠山祭り」では人は来ないが、日本遺産のデカンショ節であり、「デカンショ祭り」だから全国から注目される。三田の何祭りなのか、特徴が重要である。例えば三田の心月院では白洲次郎・正子の墓参者として、遠方から来られている。「歴女」がブームになっていたときに「墓参ラー」という呼ばれる人が三田を訪ねている。また、旧九鬼家住宅資料館は、神戸市北野の異人館街にもない明治初期の和洋折衷の特色を残す数少ない建物である。異人館街で観光している人にＰＲすれば、三田市への来訪者も増える。

今回の資料では、文化的な題材について、多くピックアップしてもらった、これをどう生かしていくかということになる。

委員　デカンショ祭りのことは、あまり知らなかった。近場でどこへ行こうかという時に地元の文化資源を訪ねるのがいいと思う。年間の文化行事・イベント情報

のカレンダーがあれば行きやすい。

委員長　神戸市交通局のバス・地下鉄の利用者増加に向けて、神戸市にある一宮（いちのみや）から八宮（はちのみや）の神社巡りを提案した。（神戸市交通局　八社巡り）。寺社を回っての御朱印が流行っているので交通局にお願いしてスタンプ帳を作ってもらったが、神社には無料で依頼したこともあり断られた経緯がある。人の活動には経費が掛かるのでボランティア、イコールただ働きという考えは間違いである。そこで１回 100 円の手数料をお支払いするようにしたところ、この取り組みは対策を生み出し、1 万枚のスタンプ帳は増刷までした。協力者には何らかのメリットがあるべきで、三田でもそういう取り組みをすれば、経済が動くのではないか。

ところで、最初に紹介された金心寺の弥勒菩薩像仏像は、如来像でありながら弥勒菩薩と呼ばれている、日本では他にない仏像である。この謂われについての説明の仕方を工夫することは重要で、三田にはそういうものがたくさんあって、羽束山も全国区になり得る山だと思う。他に文化遺産に加えたら良いものがあれば、（委員の皆さんから）事務局に伝えていただきたい。

委員　パワースポット巡りのようなものを１つの小冊子にまとめて、アピールすれば良いのではないか。また、三田には広い土地があるので、オーケストラや合唱の団体の合宿施設などがあればいいと思っている。信州やハチ北高原とかでは遠いため二の足を踏むが、三田は空気もよいし環境も良い。（音楽系）大学の合宿のメッカになればと良いと思う。

事務局　箱モノの新設となると難しい面もあるが、既存の施設であれば、見直しなどで対応できるのではないかと思う。他の委員から、市民の思いは燃えているのに市が動かない、つながらない、という意見があったが、内情としては、人材、財源とも限られている現実もある。どうすれば両者がつながるのか、1 つの例として県のコーディネーター設置を挙げていただいたが、三田市の活動に関わっておられる委員さんからもご意見をいただけるとありがたい。

委員　現在、（コロナ禍で）高齢者が巣篭っている。そういう人たちをいかに元気にするかが重要だと思っている。このコロナ禍の中で元気な活動につなげられるかが重要で、議論として、郷の音ホールのあり方が焦点となる。文化協会では今年 50 周年記念事業を行う。新型コロナ感染症の影響で演奏会など舞台関連の事業は中止せざるを得なかったが、展示会は対策を考えて実施しようとしている。行政のバックアップもいただいている。

委員　三田市内には、関西学院大学の合宿施設などがあり、活動の場に利用させてもらっている。三田市に合宿施設をつくる案は、自然の中で子どもたちを育むことに直結する良いアイデアだと思う。

三田の花火大会継続について市民は、行政と対峙して自分たちの力でやっていこうとした。行政はあえて、こういった人たちともつながるよう勇気をもって行動してほしい。

委員長　今は、情報化・高学歴化が進み、個性的でプロフェッショナルな市民が多い中、市役所職員がゼネラリストの状態では対応が難しい。市役所の中でも専門職を育てることが重要だと思う。音楽が好きな人が税金の計算だけでは嫌になってしまうのではないか。文化に精通する人材を庁内で探し、専門力のある職員が

フロントで特色を出して行けば、市民への対応も変わる。

事務局　市役所でも職員の得意分野を活かす取組みを、働き方改革としても進めようとしている。今は、民間も副業ができる時代であり、公務員の世界でも副業が議論されるなど状況は変わってきている。今後は文化芸術に関する人材や、市役所内での職員の得意分野を広げる取り組みをどのように人材活用の観点からビジョンに反映するか、今後の対応も含め検討したい。

委員長　このことは、文化ビジョンにも明記していただきたい。

閉会（～11：40）